



リハビリテーション医学講座 第9巻

「障害と心理」

三 沢 義 一 著

まずこの本のタイトル“障害と心理”に注目して頂きたい。このコンパクト・テキストに書かれてあるのは、障害者の心理でもなく、障害の心理学でもなく、障害・と・心理なのである。著者の障害と心理観は、終章において教科書の枠を越えて説得力あるプロットで語られている。読者を感銘させずにはおかまいであろう。

私事を書かせて頂くが、作業療法士として所謂障害者・児と関わるようになり数年の間、治療者の立場で知らねばならない障害者の心理とは、障害の心理学とは何なのかと教科書を捜したことを思い出す。ビンと来る書物に出会えぬまま年数を経るうちに、どうやら障害者の心理と言えるようなものは存在せず、障害者に対する時の人々の心理があるのみではないかと考えるようになっていた。障害者と健常者とを区別するものは法の施行の場合に限って存在するのみではないかと。それ故、今、この本において、長年この分野で実践的研究を続けておられる著者の説得力ある論述を得て、深く共感される方が沢山おられると思うのである。

もちろん、この本の教科書としての価値を忘れてはならない。第1章から第6章までの心理学とリハビリテーション技術について大胆なまでの簡潔さで広く概括されており、補うべき知識についての指針を与えられる。客観的立場を厳しく守られたため言葉少なくならざるを得なかったのではないかと拝察される箇所が随所にあり、人間の心理というものの難しさを改めて認識させられる。第7章では特に視覚障害者について実践的研究成果を引いて説明されており興味深い。

とにかく、嬉しいコンパクトな一冊、一読だけでなく何読でもおすすめしたい。読む人の体験に応じて、会話したくなる新たな一行が発見されることと思われる。この本を推薦させて頂くことを光栄と感じている。

(A5判 頁136 2,000円 千250 医歯薬出版 1985)

(東京大学医学部付属病院 作業療法士 石井 理恵)